

平成30年度 医学振興銀杏会総会開く



採択者一同と岸本理事長

平成30年度の医学振興銀杏会総会は、例年通り5月の最終土曜日に銀杏会館にて開催された。医学部正面玄関前の佐



第251号

公益社団法人
医学振興
銀杏会

(編集司人)

川越裕也 萩原俊郎
門田守人 米田正太郎
杉本央次 武田雅俊
上田啓次 朝野和典
木村正一 黒木尚長
森井英一 馬場幸子

多・楠本両博士の胸像に役員による献花が行われ、引き続き開かれた級会・支部交流会では、各支部・級会・学内から同窓生の活動と近況が報告された。

総会は早石雅有副理事長の司会で始まり、書面による議決権行使を含め全代議員299名中約79%の235名の参加を得て成立したことが報告された。岸本忠三理事長は、幅広い交流によって専門を超えた人間関係を築くことの重要性と、学友会がその一助を担う努力を続けていることを述べ、会員の皆様に学友会の活動にさらに関心を持っていただき、特に異なる分野の若い世代の会員との積極的な交流をお願いすることで、来年に医学伝習百五十年を迎える阪大医学部の一層の発展に資することに期待を込めた。昨年の総会以降に御逝去された113名に黙祷を捧げ、勲章・褒章受章者、学術

賞受賞者への慶祝の意が表された。公益社団法人の議事として、渡邊幹夫理事より前年度の事業・会計報告、阿部源三郎監事より監査報告が行われ、承認された。続いて平成30年度の事業計画・予算案が説明され、また次期の代議員が承認された。引き続き柴木宏実理事によって、地域医療に関する研究助成の採択者3名と岸本基金奨学助成金の採択者13名、学友会奨学金の採択者15名への授与式が執り行われた。

小休憩の後、吉森保生医学教授が「オートファジーの分子機構と病態生理」と題し、オートファジーの哺乳類における分子メカニズムと病態への関与について、ノーベル賞を受賞された大隅良典先生との様々なエピソードを交えながら講演された。続けて、金田安史医学系研究科長、土岐祐一郎附属病院副院長、大野ゆう子保健学科長、松浦善治微生物病研究所長、吉森保生命機能研究科長から、学内の現状が報告された。その後、銀杏クラブにて開かれた懇親会では、授与式に出席の学生も交えて世代を超えた賑やかな歓談が続いた。

研究助成の公募

当会では、今年度も公益事業の一環として、下記の研究助成を行います。

連絡先 (FAX) 06-6879-3503

(メール) office@ichou.med.osaka-u.ac.jp

▶地域医療に関する研究助成

対象 地域医療に貢献している病院・施設で行われている疾病の診断・治療等に関する研究をしている若手研究者(40歳未満)への助成

募集期間 9月1日～11月30日

助成額 1件50万円程度

助成件数 3～4件

▶平成30年度国際学術交流助成(後期分)

対象 外国で行われる国際学会等(9月1日～平成31年3月31日の間に行うもの)において成果発表をされる若手研究者への渡航費用助成。詳細は当会ホームページhttp://ichou.or.jp/をご覧ください。

募集期間 10月1日～11月30日

第30回シンポジウム

『地域医療の課題とその対策』開催のご案内

開催日 平成30年10月5日(金) 午後3時開会

会場 銀杏会館3階 阪急・三和ホール

テーマ 「超高齢社会における老年医学の課題」

柴木宏実先生(大阪大学 教授、老年・総合内科学)

原 英二先生(大阪大学 教授、微生物病研究所 遺伝子生物学分野)

吉川秀樹先生(大阪大学理事・副学長、整形外科)

池田 学先生(大阪大学教授、精神医学)

講演後、演者・参加者によるディスカッション

懇親会 銀杏会館2階 レストランミネルバ

(要旨) 最長寿命国日本において健康長寿達成のための方策は社会的にも関心が高い。高齢者の特徴に応じた各種疾患への対策に加えて、加齢に伴う変化そのものを疾患として対策を講じる時代が訪れている。老化そのものへの挑戦である。大阪大学は日本の老化研究2拠点の一つでもある。講演では、老年医学のアプローチや基礎老化研究の最前線に加え、実臨床において健康長寿に影響の大きい骨粗鬆症・骨折、認知症について最前線を紹介いただき、老年医学の課題への挑戦を議論する。

※参加ご希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

平成29年度秋の叙勲

文化勲章 松原謙一先生(昭31・東大理)
 文化功勞者 坂口志文先生(昭51・京大医)
 瑞宝双光章 岡本重一先生(昭37)
 瑞宝双光章 一居 誠先生(昭55)
 藍綬褒章 松原謙二先生(昭57・広島大医)

平成30年春の叙勲

旭日重光章 新家莊平先生(昭30)
 瑞宝中綬章 木下直和先生(昭39)
 瑞宝中綬章 中村敏一先生(昭42・京都薬科大)
 瑞宝小綬章 今岡真義先生(昭40)
 瑞宝小綬章 宮城信雄先生(昭47)
 旭日双光章 北村俊雄先生(昭42・和医大)
 旭日双光章 小澤孝好先生(昭59)

平成29年受章

学士院賞 北村惣一郎先生(昭40)
 学士院賞 戸田達史先生(昭60・東大医)
 救急医療功勞者大臣表彰受賞者
 嶋津岳士先生(昭55)
 救急医療功勞者大臣表彰受賞者
 本竹秀光先生(昭56)
 武田医学賞 木下タロウ先生(昭49・東大農)
 持田記念学術賞 吉森 保先生(昭56・阪大理)
 持田記念学術賞 岩井一宏先生(昭60・京大医)
 日本医師会優功賞 檜谷義美先生(昭49)

次期役員選挙にかかる候補者への立候補・候補者ご推薦のお願い(公示)

公益社団法人医学振興銀杏会 役員選挙管理委員会 委員長 北嶋 省吾

本会の現役員(理事・監事)任期は、来年の2019年5月25日開催予定の社員総会終結時をもって満了します。「役員選挙規則」に従い、下記の通り次期役員選挙を実施することをここに公示します。

- ①全会員から次期役員への立候補ならびに候補者推薦を公募(このご案内)
- ②当会代議員である先生方による選挙(2019年1月に郵送で実施)
- ③2019年5月25日の総会にて承認

次期役員への立候補もしくは次期役員に適任と思われる会員のご推薦を書面にて受け付けます。下記事務局へご連絡いただきましたら、所定の用紙をお送りします。(当会Webページ、<http://www.ichou.or.jp/>からも用紙をダウンロードいただけます)

なお、規則により役員は特定の年齢層や職種(大学・公的病院・開業医等)に偏らない選出が必要です。ご配慮の上、幅広い立候補・ご推薦をお願い申し上げます。(複数人ご推薦いただいても結構です)立候補・ご推薦の締め切りは10月31日(必着)とさせていただきます。

事務局(連絡先および提出先)

〒565-0871 吹田市山田丘2-2 公益社団法人医学振興銀杏会(大阪大学医学部学友会)
 TEL: 06-6879-3501 FAX: 06-6879-3503 E-mail: office@ichou.med.osaka-u.ac.jp

※役員(理事・監事)の職務: 理事会(定例理事会は年2回)および定時社員総会への実出席。

監事はさらに4月の会計監査を実施。

別表: 役員の定数(年齢は、2019年4月1日現在)

理事15~20名	55歳以下	6~10名	監事 2~5名
	56歳~77歳	8~12名	

業務執行理事の業務分掌

助成	助成事業の企画立案及び実施、助成金授与式
情報	銀杏メディカルネットの運営、名簿の作成、ML・メールアドレスの統括
広報	ニュース編集・発行、この法人の事業内容の広報・周知
学術	会誌の編集・発行、シンポジウム等の企画・実施
会計	歳入、歳出の予算及び決算に関する事項、会費の徴収、経費の支出、預貯金及び金銭の保管、理事会・総会における予算・決算報告
庶務	会議の開催、渉外、慶弔、文書の作成並びに保管ほか、いずれの分担業務にも属していないもの

寄 附 御 礼

平成30年4月1日から7月12日までに22,908,000円のご寄附を頂き、誠にありがとうございました。
公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は個人・法人とも税金控除の対象となります。詳細に関しては、当会事務局までお問い合わせください。

川越 裕也	先生(阪大医 昭30)	より50,000円をご寄附頂きました
渡部 泰夫	先生(阪大医 昭33)	より100,000円をご寄附頂きました
西村 道彦	先生(阪大医 昭35)	より1,000,000円をご寄附頂きました
岸本 忠三	先生(阪大医 昭39)	より20,000,000円をご寄附頂きました
塚本 玲三	先生(阪大医 昭40)	より50,000円をご寄附頂きました
松山 辰男	先生(阪大医 昭40)	より50,000円をご寄附頂きました
真下 節	先生(阪大医 昭48)	より50,000円をご寄附頂きました
岩崎 勲	先生(阪大医 昭52)	より50,000円をご寄附頂きました
嶋谷 薫	先生(阪大医 昭62)	より50,000円をご寄附頂きました
片岡 竜貴	先生(阪大医 平13)	より30,000円をご寄附頂きました
小林 政雄	先生(阪大医 平30)	より10,000円をご寄附頂きました

15名の先生より金一封をご寄附頂きました

秋山 邦夫	先生(阪大医 昭19専)	坪倉 修吉	先生(阪大医 昭28)
細川 桂一	先生(阪大医 昭30)	木下 渥	先生(阪大医 昭34)
井上 明生	先生(阪大医 昭36)	木下 直和	先生(阪大医 昭39)
佐藤 信紘	先生(阪大医 昭40)	早石 雅宥	先生(阪大医 昭42)
萩原 俊男	先生(阪大医 昭43)	小浜 譲次	先生(阪大医 昭47)
中村 正廣	先生(昭和大医 昭52)	谷尾 吉郎	先生(阪大医 昭53)
吉良 正浩	先生(阪大医 平02)	齊藤 純	先生(阪大医 平15)
森 久美子	先生(阪大医 平16)		

匿名の会員様より10,000円のご寄附を1件、20,000円のご寄附を3件、
30,000円のご寄附を1件、50,000円のご寄附を2件頂きました

9名の会員様より金一封のご寄附を頂きました
大阪大学同窓会連合会より33,000円のご寄附頂きました

医学部長通信

第11回 金田安史(昭55)

長期ビジョンに基づいた部局運営

私が学部長に就任したとき掲げた方針は、独創的な研究の推進と次世代人材育成の強化、です。その方針に従って、教育・研究においてさまざまな取り組みを展開して参りました。優秀な学部生・大学院生の確保のために、入試広報に努め、絶えず入試方法も検討しその改革も行っています。国際認証に適合する学部カリキュラム改革、医歯薬生命系の共通の大学院教育プログラムの検討にも取り組んでいます。若手の優秀な研究者を国内外から招いてセミナーや共同研究のための面談も行う研究科主宰セミナー、医学系を中心として学内の若手研究者が独自に運営する若手フォーラムも定期的に開催しており、その中から共同研究が生まれ、また教授候補者も見出されています。2014年から始めた新研究分野創生事業(基礎の研究室を中心に複数の臨床系講座が参画し新たな研究領域を創生する)も石井教授、山下教授、吉森教授のプロジェクトは1期目(3年間)の実績をもとに、新たな展開を目指す2期目に入り、将来はセンター化を目指しています。また今回新たに磯教授と竹田教授のプロジェクトを採用し、研究スペースを手配いたしました。

昨今は大学の運営費交付金の削減などにより大学の財政状況が苦しくなり大学運営が岐路に立たされています。人件費の削減策とともに、自己財源の確保も考えねばなりません。しかし大学経営が企業と同じ考え方でよいはありません。そう言った途端に大学は不要となるでしょう。大学はやはり独自の価値観の中で人材の輩出と学問の発展に寄与すべきです。財源確保のために大型研究費の獲得、産業界との提携、寄附の依頼、などの活動は必要ですが、それは教育と研究の実績があってできるものだとことを忘れるべきではありません。

大学の継続した発展のためには、このような大学本来の姿勢が長期ビジョンのもとにいつも貫かれていることが最も重要であると考えます。総長や部局長が代わるたびに方針が変わるようでは大学の将来はありません。

医学部医学科におきましては、上に掲げた方針の下、10年、20年先、部局が安定して発展できるような方策を考えてもらうために40歳代の教授からなる長期計画検討会議を設置しました。学部長はサポートはするが口は出さない約束にしています。このような活動を通じて、医学部・医学系研究科が将来も輝ける存在であり続けることを大いに期待しております。

公益社団法人 医学振興興杏会

正味財産増減計算書

平成29年4月1日から平成30年3月31日まで

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	当年度内訳		
			公益目的事業	共益事業	法人会計
I 一般正味財産増減の部					
1. 経常増減の部					
(1) 経常収益					
基本財産運用益	314	314	314	0	0
特定資産運用益	9,094	14,325	8,115	979	0
受取会費	24,560,000	24,680,000	16,000,000	3,280,000	5,280,000
事業収益	453,000	358,000	328,000	125,000	0
受取寄附金	3,360,000	3,621,000	3,000,000	35,000	325,000
受取寄附金振替額	14,589,216	15,079,473	14,589,216	0	0
雑収益	206,034	186,065	34	0	206,000
他会計からの繰入額	0	0	0	0	0
経常収益計	43,177,658	43,939,177	33,925,679	3,440,979	5,811,000
(2) 経常費用					
支払助成金	20,760,000	21,600,000	20,660,000	100,000	0
支払寄附金	0	0	0	0	0
地域医療ネットワーク費	301,373	555,434	301,373	0	0
通信運搬費	2,161,907	1,990,663	382,580	1,092,112	687,215
印刷製本費	2,547,718	1,953,387	1,294,519	963,087	290,112
コンピューター費	137,294	85,266	137,294	0	0
給与手当	10,770,908	10,343,407	7,539,635	1,077,091	2,154,182
退職給付費用	0	1,050,000	0	0	0
福利厚生費	2,635,562	2,601,304	1,261,339	180,191	1,194,032
旅費交通費	452,050	457,120	312,162	44,406	95,482
消耗什器備品費	0	0	0	0	0
消耗品費	57,644	95,970	50,874	0	6,770
修繕費	0	0	0	0	0
光熱水料費	115,910	118,540	57,955	0	57,955
支払手数料	521,203	521,959	114,563	3,522	403,118
減価償却費	699,364	536,959	699,364	0	0
会議費	902,576	913,421	0	0	902,576
新聞図書費	7,058	10,586	0	0	7,058
研修費	1,149,815	100,000	1,149,815	0	0
雑費	24,840	23,760	0	0	24,840
経常費用計	43,245,222	42,957,776	33,961,473	3,460,409	5,823,340
評価損益等調整前当期経常増減額	△ 67,564	981,401	△ 35,794	△ 19,430	△ 12,340
基本財産評価損益等	0	0	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0	0	0
評価損益等計	0	0	0	0	0
当期経常増減額	△ 67,564	981,401	△ 35,794	△ 19,430	△ 12,340
2. 経常外増減の部					
(1) 経常外収益					
固定資産売却益	0	0	0	0	0
経常外収益計	0	0	0	0	0
(2) 経常外費用					
固定資産売却損	1	2	1	0	0
経常外費用計	1	2	1	0	0
当期経常外増減額	△ 1	△ 2	△ 1	0	0
当期一般正味財産増減額	△ 67,565	981,399	△ 35,795	△ 19,430	△ 12,340
一般正味財産期首残高	88,118,948	87,137,549			
一般正味財産期末残高	88,051,383	88,118,948			
II 指定正味財産増減の部					
受取寄附金等	18,971,500	20,968,759	18,971,500		
一般正味財産への振替額	14,589,216	15,079,473	14,589,216		
当期指定正味財産増減額	4,382,284	5,889,286	4,382,284		
指定正味財産期首残高	31,317,470	25,428,184	31,317,470		
指定正味財産期末残高	35,699,754	31,317,470	35,699,754		
III 正味財産期末残高	123,751,137	119,436,418			

ホームページでも公開しております。ホームページアドレス→ <http://www.ichou.or.jp/joho.html>

助成事業採択者一覧(敬称略)。平成30年5月26日総会にて授与式を執り行いました)

1. 平成29年度 地域医療に関する研究助成、3件、各50万

柏木 理佐:住友病院人間ドックの受診者、全27,052例のデータを用いて腹間変化やアディポネクチン濃度変化による糖尿病発症率を研究する

原田祥太郎:VZV関連 顔面神経麻痺症例の早期診断の開発

宗方 幸二:下部直腸癌における側方リンパ節転移の術前診断システムの構築

2. 平成30年度 学友会奨学金 15件、各20万円

学部学生:(2年次)小川軌明、金子博光、平井沙貴 (6年次)甲斐千舟

大学院生:(1年次)大田純斗、高 琪、鞠 楠、武田明子、濱川菜桜、YANG YIYI

(2年次)常 久洋、刀禰充世 (3年次)中路 拓、山下八洋 (4年次)島井良重

3. 平成30年度 岸本基金奨学助成金採択者 13件、1年次:60万円、2年次~6年次:120万円

(1年次)今村志郎、宮内波奈 (2年次)水上史統、山崎義昭、山本拓都 (3年次)井村祐己、浜野彰太 (4年次)竹内太郎、水野 彰

(5年次)辻井敦子 (6年次)鬼追芳行、朴 正薫、安水良明

4. 平成29年度 国際学術交流助成 10件、各10~22万円

奥村雄一郎(消化外Ⅰ・中)梶山裕太(神経内・加)串岡純一(整形外・米)梶屋絵理子(保ヘルスプロモーションシステム科学・米)

齋藤義修(消化内・米)島田果林(腎臓内・米)新毛豪(消化外Ⅱ・中)高嶋和磨(運動器・米)森川貴嗣(認知行動・米)吉岡鉄平(消化内・米)

トピックス

加齢と見にくさ：単眼複視と両眼複視

加齢に伴い、近方が見にくくなることはいわゆる老眼としてよく知られている。しかし遠方が見にくくなることもしばしばある。この場合、物がダブって見えるという症状(複視)を伴うことが多い。片目をつぶってもダブって見える場合を単眼複視といい(図1A)、加齢とともに乱視の角度が変わったり、度数が増えることが原因である。多くの場合、眼鏡の度数を変えることで対応できる。一方、眼鏡で矯正できない、不正乱視が増える場合もある。これは加齢とともに水晶体の屈折率が不均一になることにより生じる。症状が強い場合は眼内レンズ挿入術が必要になる。

白内障手術時に挿入される眼内レンズは、進化している。先進医療になるが、多焦点眼内レンズが普及しつつあり、遠方にも近方にも焦点が合う構造になっている。しかしながら、遠方の像と近方の像の切り分けができず、どの距離にもピントが合わない場合がまれにあるので注意する必要がある。最近、焦点深度の深い多焦点眼内レンズが開発され、中間距離でも見やすくなっている。

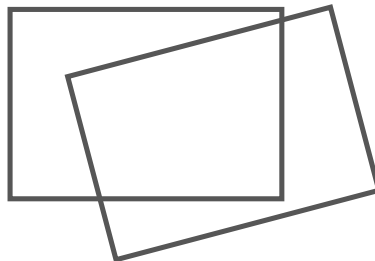
一方、両眼で見るとダブって見える場合は両眼複視である。近年、加齢性斜視の概念が提唱されている。外眼筋を支える結合組織が加齢とともに脆弱になり、外眼筋の走行が変化することで、上下の斜視が生じるという理論である。頭部MRIの画像で、外眼筋の走行異常を確認することができる。加齢性斜視の場合、片目の像が傾くことが多い(図1B)。斜視の角度が小さければプリズムの眼鏡で対応可能である。プリズム眼鏡で対応できない場合は斜視手術が必要になる。回旋と上下の斜視を同時に矯正する手術方法は、以前われわれが報告したが、上下の直筋を横方向にずらすことで対応できる。

高齢化社会では、準高齢者(75歳まで)は、働くことが求められている。QOLを維持するために、目の健康は重要である。見にくさは年のせいだといってあきらめずに、眼科医に相談してください。

A



B



感覚機能形成学

不二門尚(昭57)

図1 複視のシミュレーション

A：単眼複視の見え方：視標が2つに分かれて見える。

B：両眼複視の見え方：片目をふさぐと1つに見えるが、両目で見ると、像が傾いて重なって見える。

提

言

け常に前向きに生き、15歳から65歳の生産年齢を85歳までとし、85歳から99歳までを経験を活かしたアドバイスによる社会的貢献年代とし、百歳から余生とするものである。

2017年9月、英国のリンダ・グラットン教授(ロンドン・ビジネススクール)は人生百年時代を提唱された。

先生の提唱される多様な理想的な生き方は、教育されて成長し、仕事に就いたあとも学び個々の適した仕事に就き、学び直して趣味や技を身につ

人生百年時代

を比較すると、後期高齢者の医療費は前期高齢者の約1.5倍であるが、介護費は前期高齢者の約11倍と介護費が医療費を大きく上回っている。

10年前から産・学・官・民で工夫・実践が活発になってい

など広く高齢者の会員を募っている。これらの活動の効果について、厚生労働省は3月9日、日常生活を支援なく過ごせる期間「健康寿命」の

意している多数の場の中から自分に適した所で、好きな時間働き、学び、遊んで、リラックスできる家で休むことができれば、リンダ・グラットン教授のいう多様な理想的な生き方ができるのではなかろうか。

この事は、後期高齢者では日常生活に支障を来す要介護の人、それも介護度の高い人の多いことを示すものである。

修会など教育の場を提供し、官では大阪府後期高齢者医療広域連合会活動などで高齢者の健康長寿のための手段が提

後期高齢者には、経験で得た知識と技術、人脈、時間という特典がある。これらを活かして、産・学・官・民の用

「悟りとは、平気で死ぬることではなく、平気で生きることである。」 (子規)

川越裕也(昭30)



…その152

資生堂ショックを知って、やるね、と思いました。資生堂では時短で働く美容部員が1万人中千人を超え、一番忙しい

私が卒業した昭和61年頃、は、あからさまに女性お断りという科もあり、産婦人科も

資生堂ショック

ありました。支えられる側が増加してくると、これを当然とすることは困難になってきます。

次回には微生物病研究所 籾本難病解明寄附研究部門教授 村上良子先生(昭59)にお願いいたしました。

年春から育児中の時短勤務者も夜間までの遅番や土日の勤務を入れる方針になり、この

私が卒業した昭和61年頃、は、あからさまに女性お断りという科もあり、産婦人科も

ん。そして、同窓会及び医局が関連病院に院内保育所、病児保育を作るよう働きかけるなどし、この10年で女性医師の働く環境はかなり整ってき

私も居残りオンコール当直免除の恩恵をうけたことがあ

市立伊丹病院産婦人科は常勤7人中女性が6人、1人が

市立伊丹病院 産婦人科主任部長 雨宮京夏(昭61)

診療科 紹介

中央クオリティマネジメント部

当部は2001年に院内措置によりクオリティマネジメント部として設置され、2003年4月に文部科学省

の予算措置により、我が国の大学病院ではじめての「医療の質・安全」を担当する部門

である「中央クオリティマネジメント部」として設立されました。

10名の専従職員で構成されています。特定機能病院では平成30年度から専従の医師を医療安全部門に1名配置するこ

とが義務化されましたが、本院では歴代の病院長および多くの診療科長等の御配慮により、早くから若手臨床医を含む複数名体制をとってきまし

た。

また当部医師の1名は厚生労働省に出向し、本年4月に開催された第3回閣僚級世界患者安全サミットの企画運営にも携わりました。さらに、クロスアポイントメント(本

学と相手方機関の双方の身分を有し双方の業務を行う)制度の利用により、他大学の臨床系教員も2名在籍していま

す。

現在のスタッフは、医師4名、看護師3名、薬剤師1名を含む

ます。

医療の質・安全の実務においては、「失敗を後知恵で批判する、単純な因果関係で事故を説明する、安易にルールを増やす」ことのないよう、臨床と同様の考え方で、的確な診断、適切な治療や予防を行うよう心掛けています。医療チームや医療機関は生体システムに似ており、複雑で適応的かつ動的なシステムであることから、個々のイベント(インシデントや有害事象)への対応療法に終始することなく、システムミックスなアプローチによる対応に努めています。

現在までに診療科や職種を越えた協力・連携により実施した対策には、手術安全チェックリストの導入、気道確保リスク評価表の開発、放射線画像診断や病理診断レポートの確認体制の整備、抗血栓療法に関する指針の作成、転倒患者の頭蓋内病変及び骨折の評価・対応フローチャートの開発等、さまざまなものがあります。

また、地域医療への貢献として、病院や医師会等における医療安全の講演、医療安全に関する監査委員会や医療事故調査委員会への外部委員派遣、危機管理に関する相談に対する助言等を行っています。

教育面においては、医療安全に関する教育法や教材の整備がまだ不十分であることから、ゲームを取り入れたチーム医療の教育法、ノンテクニカルスキル、サージカルファシア、リフイーディング症候群に関する教材、患者の医療安全への参加支援ツール等を開発し、学生(医学部、歯学部、薬学部)、医療者、患者への教育に用いています。これらの一部は当部のホームページに公開しています。

研究面では、レジリエンス・エンジニアリングに取り組んでいます。これは、個人のパフォーマンスをがちがちに制御することで失敗をなくそうとするのではなく、チームや組織を「システム」としてとらえ、さまざまな変動と

制約のある環境下で、システムがレジリエンス(柔軟性、自律性、省エネ性)を発揮している機序を解明し、さらにはレジリエンスをシステムに実装(synthesis)しようとするものです。手術チームのシステムダイナミクスをはじめ、物事がどのようにうまく行われているのかを科学的に解き明かしたいと考えています。

当部は歴史の浅い小さな部門ですが、様々な専門性を有する医師や多職種の医療職が、「医療の質・安全」を共通言語として緊密に相互作用することができると強みを有しています。ここから生まれる創発的なひらめきを臨床・教育・研究に活かし、さらには医療の質・安全に精通した人材育成とネットワーク構築に全力を尽くす所存です。学会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

中島和江(昭63)

